

女性のアンダーヘア処理と性的偏見

田中麻子

問題の所在

近年、「ハイジニーナ脱毛」と呼ばれるアンダーヘア¹ 処理が若い世代を中心に注目を浴びている。² 「ハイジニーナ」とは、衛生を意味する *hygiene* を語源とし、アンダーヘアの全部または大半を処理した状態を指す。欧米では2000年以降に流行し、日本では2008年以降に放映されるようになったアメリカのテレビドラマで、ニューヨーク在住の独身女性4人の生活を描いた「*Sex and the City* (セックス・アンド・ザ・シティ)」の影響を受けてハイジニーナ脱毛が流行したといわれているが(週刊ポスト, 2010, p. 132)、定かではない。

清潔感やファッションの観点からハイジニーナ脱毛への関心が高まる一方で、ハイジニーナ脱毛に対する性的イメージや社会的偏見も根強く、ハイジニーナ脱毛を躊躇する女性たちも多い。そこで本論は、日本においてハイジニーナ脱毛している女性たちの生活経験を探ることで、最もプライベートな身体部位と言っても過言ではない個人の性器およびアンダーヘアをめぐる社会意識についての分析を試みた。

1 体毛に対する意識とアンダーヘア処理の現状

日本におけるハイジニーナ脱毛の社会的な位置づけを捉えるには、女性の体毛に対する社会意識とアンダーヘア処理の現状を把握する必要がある。ここではまず、体毛意識とアンダーヘア処理についての海外と日本の先行研究を考察し、日本のハイジニーナ脱毛の背景を整理する。

1.1 体毛に対する意識

有毛を男性性の象徴とし、無毛を女性性の象徴とするような体毛の有無と理想的なジェンダーとの関係は従来より指摘されてきた(Basow, 1991; Basow & Braman, 1998; Synnott, 1993; Tiggemann & Kenyon, 1998; Toerien & Wilkinson, 2003)。例えば Basow & Braman (1998) は、有毛の女性の写真

と無毛の女性の写真に対する大学生の反応を比較し、有毛の女性は無毛の女性よりも、魅力、社交性、肯定的、幸福のすべてにおいて低く評価され、より活動的で、強く、攻撃的であると評価されることを明らかにし、体毛が男性性と強く結びつけられていることを指摘している。また、Tiggemann & Lewis (2004) による調査では、女性の脇の下が除毛されていない状態に対する嫌悪感、食べ物にハエやウジ虫がとまっているのを見るときにもよおされる嫌悪感と同レベルであるという結果も出ており、女性の有毛は社会的に容認されていないといえる。

無毛と女性性を結び付ける体毛意識は、女性たち自身にも内在化している。欧米を中心とした1990年以降の調査からは、9割以上の女性たちが足や脇の下の体毛を処理していることがわかっている (Basow, 1991; Tiggemann & Kenyon, 1998; Tiggemann & Hodgson, 2008; Toerien, Wilkinson, & Choi, 2005)。また、女性たちが体毛処理を始める動機や体毛処理を継続する理由としては、「[体毛処理した方が] 魅力的に感じる」、「柔らかく、すべすべした肌の感じが好き」、「体毛は見苦しい」といった外見を意識したものや、「男性は体毛がない女性を好む」、「体毛処理しなければ馬鹿にされる」、「[体毛処理は] 当たり前のこと」、「女性は体毛処理するものだと考えられている」といった他者の視線や他者との関係性から影響を受けているものが目立つ (Tiggemann & Kenyon, 1998, p. 880; Tiggemann & Lewis, 2004, p. 383)。

日本においても、女性の体毛に関する状況と意識には同じような傾向が見られる。ポーラ文化研究所 (1988) が214名の女性に対して行った調査では、93%の被調査者が脇毛を抜くか剃るかの方法で全処理していることがわかった (p. 12)。体毛処理の理由は、上位から「体毛を見せるのは恥ずかしい」(54.2%)、「[体毛が] 無い方がすっきりする」(35.5%)、「エチケットだから仕方なく」(30.8%)、「人の目が気になるから」(29.9%)、「不潔に見えるから」(25.3%) などとなっており、「無い方がすっきりする」といった自分自身の快・不快を理由とするものよりも、他者の視線を意識した回答が多く挙げられている (p. 12)。また、同調査では男性202名にも調査を実施しており、60.9%の男性と69.6%の女性が「脇毛を剃らない女性」を「好ましくない」と評価し (p. 13)、さらに若い世代であればあるほど女性の無毛化を良しとす

る傾向が強い結果となっている (p. 15)。

このように、欧米においても日本においても、女性の体毛に対する評価は否定的であり、一見個々人の選択で行われているように見える女性たちの体毛処理は、他者の視線や他者との関係性に強く影響を受けて行われているといえる (Yakas, 2009)。

1.2 アンダーヘア処理の現状

それでは、アンダーヘア処理についての意識・実態はどうだろうか。

1953年から2007年の間に発行された645冊の雑誌「PLAYBOY (プレイボーイ)」を分析した Schick & Rima & Calabrese (2009) は、1990年－1999年にかけて、アンダーヘアを一部処理したモデルたちが雑誌に登場し始め、2000年－2007年にかけて、アンダーヘアを全処理したモデルたちが登場するようになったと指摘している (p. 3)。

Toerien et al. (2005) が678名の女性を対象にイギリスで行った調査では、85.69%の女性がビキニラインを含むアンダーヘア処理を経験しており、うち53.98%がビキニライン以上のアンダーヘア処理を経験している (p. 402)。また、Tiggemann & Hodgson (2008) が235名の女性 (平均年齢21.1歳) を対象にオーストラリアで行った調査では、48%の女性がアンダーヘアのほとんどあるいは全毛を処理しており (p. 889)、ビキニラインのアンダーヘア処理については85.1%にのぼっている (p. 893)。さらに、Herbenick, Schick, Reece, Sanders, & Fortenberry (2010) が2,451名の女性 (平均年齢32.69歳) を対象にアメリカで行った調査では、全体のおよそ1割がアンダーヘアを「恒常的に全処理している」と回答し、うち18歳－24歳の群では、アンダーヘアを「恒常的に全処理している」(20.6%)、「ときどき全処理する」(38%) とアンダーヘアの全処理経験者が過半数を超え、若年層であればあるほどアンダーヘアの全処理の割合が高くなる一方で (p. 5)、50歳以上の被調査者142名のうち半数以上 (52.1%) がアンダーヘア処理を「全くしない」と回答しており (前掲, p. 5)、アンダーヘアの全処理には世代が大きく影響していることがわかる。

アンダーヘア処理の方法については、Toerien et al. (2005) の調査では

シェイビングが64.01%、除毛クリームが46.61%、家庭でのワックスが20.06%と続き (p. 402)、Herbenick et.al. (2010) の調査でも、全毛処理経験群ではシェイビングがどの年齢層でも圧倒的に多く使用されており、電気脱毛やレーザー脱毛の利用者はどの年齢層においても全体の1%前後であることから (p. 5)、海外におけるアンダーヘア処理の方法としてエステサロンの利用は一般的ではないといえる。³

アンダーヘア処理をする理由としては、Tiggemann & Hodgson (2008) の調査では、アンダーヘアを一部処理している群については、「清潔感がある」(4.2ポイント：以下「ポイント」省略) が最も高く、次に、「自分を肯定的に感じる」(3.8)、「魅力的に感じる」(3.8)、「セクシーだと思う」(3.8) が続いている (p. 894)。また、アンダーヘアを全処理している群では、「清潔感がある」(4.4) が同様に最も高く、続いて、「性的経験をより良いものにする」(4.2)、「セクシーだと思う」(4.2)、「自信を持てる」(4.0) など自身の快・不快を理由とするものが挙げられた (p. 894)。一方で同調査では、アンダーヘア処理に影響を与えたものとして、「パートナー [からの影響]」(0.28) が最も多く挙げられた (前掲, p. 895)。

また、Herbenick et al. (2010) の調査では、年齢・性的指向・性関係の有無を調整後、アンダーヘアを全処理している群とアンダーヘア処理を全くしていない群を比べると、全毛処理群の方が自身の陰部を見る頻度が多く (全処理している群65.7%；全く処理していない群41.6%)、自身の性器や性機能について肯定的なイメージを持っている女性が多いことがわかっている (pp. 1-5)。⁴ さらに、産婦人科を受診する頻度も、アンダーヘアを全処理している群では81.8%であるのに対し、全く処理していない群では77.4%とわずかながら低く (Herbenick et al., 2010, p. 6)、自身の性器に対する意識の差が見られる。

また、性行為に関しても違いが見られる。Herbenick et al. (2010) によると、アンダーヘアの全処理をしている群は、アンダーヘア処理を全くしていない群よりもオーラルセックスを受けることが多く (前者81.6%、後者58.7%)、また、アンダーヘアを全処理している群は、アンダーヘアを全く処理していない群よりも、「痛み」を除く全項目「性的興奮」「性的欲求」「潤滑性」「オーガ

ズム」「満足度」について高い数値（より該当する項目がある）を示している（pp. 6-7）。⁵

日本のアンダーヘア処理については資料が少ないが、江戸時代には男性用の風呂屋に「毛切り石」と呼ばれるアンダーヘア処理用の道具が置いてあり（風柳庵&鶏告亭&一立斎, 1849）、また吉原の遊女たちがアンダーヘア処理をしていたという資料も残っていることから（二之宮, 2011）、江戸時代に一部の人々の間ではアンダーヘア処理が行われていたことがわかる。しかし、例えば戦後の赤線従業員や占領軍相手に売春を行っていたパンパンらの中ではアンダーヘア処理は習慣化されていないため（下川, 1992）、吉原遊廓の習慣がその後そのまま受け継がれたとはいえない。むしろ1934年には生まれつきアンダーヘアが発育しない陰部無毛症に「悩める人々」への特効薬が発売されたり（前掲, p. 140）、1956年には無毛症の女性が結婚できない問題が指摘されたりと（荒川, 1956）、アンダーヘアが無い状態は否定的に捉えられていることがわかる。

また、日本ではアンダーヘア自体に呪術的な力や性的魅力があると考えられていたため（荒川, 1956; 下川, 1992）、アンダーヘアを露出することはタブーであり、1991年にヘア解禁されるまでは、雑誌や映画などでアンダーヘアを露出させることが摘発の対象となっていた。⁶ しかし、1980年代後半には摘発もゆるまり、1980年代のヌード写真では陰毛が確認できるほか（末井編, 1981-1988）、ヘア解禁以降は一般雑誌にもアンダーヘアが掲載されるようになる（安田&雨宮, 2006）。1990年代のヘアヌード写真集の販売やアンダーヘア無修正の映画上映開始、また、1997年のレーザー脱毛機導入開始を考えれば、他者との比較からアンダーヘアへの意識が高まったのは90年代以降ではないかと推測できる。

日本におけるアンダーヘア処理状況についての調査はほとんど無く、脱毛クリニックによって行われた調査が唯一であるといつてよい。東京都内在住の20代-30代の男女340名を対象とした東京イセアクリニック（2011）によると、アンダーヘアを常時/たまに処理する20代女性は65.2%、30代女性は57.14%であり、20代男性は16.2%、30代男性は25.6%と、女性では過半数以上がアンダーヘアの処理を行っており、男性でも四分の一前後が手入れを

行っている (p. 3)。また、「アンダーヘアを処理しない理由」としては、女性では「そもそもケアすることを知らない」(21.0%)、「見せる機会がないから」(18.2%)、「方法がわからない」(16.5%)、「無頓着・関心がない」(16.5%)と続き、アンダーヘア処理への無関心と、周囲からの影響の少なさがわかる(前掲, p. 4)。男性については「無頓着・関心がない」(41.0%)が圧倒的理由で、続いて「パートナーから何も言われない」(16.6%)、「ケアするなんて変だと思うから」(16.0%)と男性のアンダーヘア処理を当然視しない意見が上位を占めている(前掲, p. 4)。さらに、異性がアンダーヘア処理することに対する印象としては、男女ともに「好印象」(女性32.8%、男性36.6%)が最多で、「悪印象・不愉快」(女性2.6%、男性0%)は最も少なく(前掲, p. 4)、わずかながら女性のアンダーヘア処理の方が男性のそれよりも一般的で好印象であると見なされているが、若い世代においては男女共にアンダーヘア処理が肯定されているといえる。

同調査において、アンダーヘアを処理すると回答した人の処理方法としては、女性は「剃髪」(27.7%)、「カット」「クリニック脱毛」(ともに20.5%)、「毛抜き」(13.3%)、「エステ脱毛」(11.4%)となり、サロン使用者は34.3%に及ぶ。男性については、「カット」(39.5%)が最多で、サロン使用者は10.5%に留まっている(前掲, p. 6)。処理のきっかけとしては、女性では「周囲・友人」「水着を着るため」(ともに21.4%)が最多で、続いて「テレビ・雑誌」「海外ドラマや欧米諸国情報」なども上位に入っており、男性では「何にも影響を受けていない」(21.3%)が最多であった(前掲, p. 6)。

2 本調査の概要と結果

2.1 調査の目的

先行調査から、欧米においても日本においても、若い世代を中心にアンダーヘアをケアする概念がある程度浸透していることがわかった。また、欧米ではアンダーヘアの全毛処理も増えており、かつ、アンダーヘアの全毛処理が肯定的に捉えられていることがわかった。しかし、日本においてはアンダーヘアの全処理についての調査はない。先に見たように、日本ではアンダーヘアそのものに意味づけが為されてきた歴史的経緯があるため、アンダーヘアケア自体に

は肯定的であっても、全毛処理に対しては別の意識が存在する可能性もある。そこで、アンダーヘアを全処理した経験のある女性たちの生活経験を問い、アンダーヘア処理に影響する社会意識の分析を試みた。

2.2 ハイジニーナ脱毛経験のある女性たちの生活経験

2.2.1 調査方法と被調査者の属性

2011年2月－3月の2カ月間、SNSの四つのコミュニティに属している女性460名にインターネット調査を依頼した。できるだけアンダーヘアの全毛処理経験がある女性を選出できるよう、上記コミュニティとして、「ハイジニーナ」をコミュニティ名に含む三つのコミュニティ（上記SNSにはハイジニーナをコミュニティ名に含むものは三つのみ）と、同じくアンダーヘア処理を意味する「パイパン」をコミュニティ名に含み且つ参加者が最多であったコミュニティの四つを選択した。その中で、参加者のプロフィールが女性である人を460名選択し、調査を依頼した。回答者数は69名（回答率15%）であったが、男性回答者1名、アンダーヘアを「全く除毛・脱毛していない」女性3名を除き、有効回答者数を65名とした。調査を依頼する際には年齢制限を設けなかったが、インターネットに対応できる年齢であることが影響したためか45歳以上の回答者はおらず、15歳－19歳が2名（3.1%）、20歳－24歳が15名（23.1%）、25歳－29歳が29名（44.6%）、30歳－34歳が12名（18.5%）、35歳－39歳が5名（7.7%）、40歳－44歳が2名（3.1%）で、20代が6割以上を占めた（67.7%）。また、調査依頼の際に、調査対象者を「アンダーヘアの全処理を考えている方、経験したことがある方、半永久的な全処理を終えている方」と設定したため、有効回答者の女性たちはアンダーヘアを全処理している人が多く、「レーザーなどで全毛を脱毛している」人が45名（69.2%）、「エステサロンには行っていないが自分で全毛を常時/定期的に処理している」人が16名（24.6%）、「ピキニラインのみ処理している」人が4名（6.2%）であった。

2.2.2 調査結果

永久脱毛または定期的な全毛処理経験のある女性61名を対象に全処理を始

めた年齢を尋ねたところ、25歳－29歳に始めた人が最も多く（24名、39.3%）、続いて20歳－24歳（14名、23.0%）、15歳－19歳（8名、13.1%）、30歳－34歳（7名、11.5%）、35歳－39歳（3名、4.9%）、10歳－14歳（2名、3.8%）、不明が3名（4.9%）となり、20代で全毛処理に関心を寄せる女性が多いことがわかった。

また、全毛処理経験者のアンダーヘアケアの情報源（複数回答可）は、「[エステサロンや処理方法について] インターネットで調べた」（29名、47.5%）、「友人に相談した」（18名、29.5%）、「誰にも相談しなかった」（17名、27.9%）、「恋人や配偶者に相談した」（15名、24.6%）、「エステに相談した」（12名、19.7%）、「家族に相談した」（7名、11.5%）となり、「ポルノを参考にした」（2名、3.3%）、「グラビアを参考にした」（「その他」より）という人もわずかながらいた。

次に、全毛処理経験者を対象に、全毛処理の動機について複数回答可能で尋ねたところ、回答者数の多かった順に、「清潔だから」（43名、70.5%）、「下着からアンダーヘアがはみ出るのが嫌だから」（40名、65.6%）、「アンダーヘアがあるのがうっとうしいから」（38名、62.3%）といった自身の快・不快を理由とするものや、「興味があった」（28名、45.9%）など自身の意志によるものが上位を占めた。一方、「恋人や配偶者に頼まれたから」（9名、14.8%）といった他者との関係性による理由は低い回答率となったが、全毛処理する際の情報源では「恋人や配偶者に相談した」（15名、24.6%）となっており、全毛処理の動機としての位置づけは低くとも、恋人や配偶者などいわゆる性行為のパートナーとなる相手の影響は少なからず受けていることがうかがえた。なお、ビキニラインのみ処理している女性は4名のみだが、彼女たちの脱毛動機も全毛処理経験群と同様の理由が上位を占めた。「その他」としては、「月経の際のかぶれを軽減させるため」「肌の負担（肌荒れ）を減らすため」など衛生上の理由が最も多く挙げられた。その他にも、「ファッションとして」「水着をはく際に」「可愛い！」といったファッション感覚のものや、「海外セレブ [リティ] の影響を受けて」「セックス・アンド・ザ・シティの影響」といった海外の影響を示す回答も少数ながらあった。

アンダーヘアの全処理に対して他者の視線や他者との関係性がどのように影

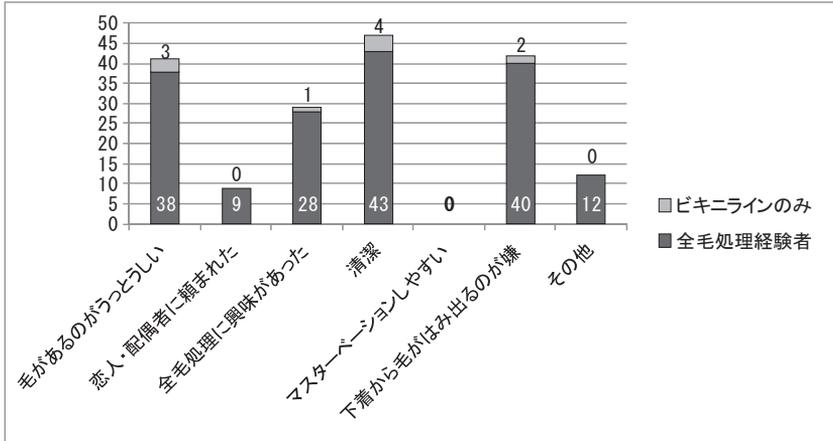


Figure 1 女性がアンダーヘア処理する理由 [人]

響するのかを検討するために、アンダーヘアの全処理を躊躇する・した理由についても複数回答可能で尋ねた。全毛処理経験者では、「脱毛費用が高い」（20名、32.8%）や「脱毛処理が痛い」（14名、23.0%）のように、脱毛そのものへの懸念もあったが、それ以上に「温泉など公衆浴場に行きにくい」（25名、41.0%）、「家族には言えない」（16名、26.2%）、「産婦人科の検査を受けにくい」（16名、26.2%）といった他者の視線を気にするものが上位を占めた。ビキニラインのみ処理する人についても、脱毛処理そのものへの懸念と他者の視線を気にするものに票が集まった。「その他」の項目には、性器の黒ずみが見えやすくなることへの懸念や、性行為において相手の反応を懸念する声が上がった。

アンダーヘアを全処理する当事者たちが懸念する他者の視線だけではなく、アンダーヘアの全処理に対する人々の実際の反応を分析するために、アンダーヘアの全処理経験者に、全処理したことを相談したり打ち明けたりしたときの他者の反応についても複数回答可能で尋ねた。その結果、「驚かれた」（25名、41.0%）が最も多い反応となった。驚くという反応は、それだけでは否定的な反応とも肯定的な反応ともいえないが、少なくとも「普通のことではない」

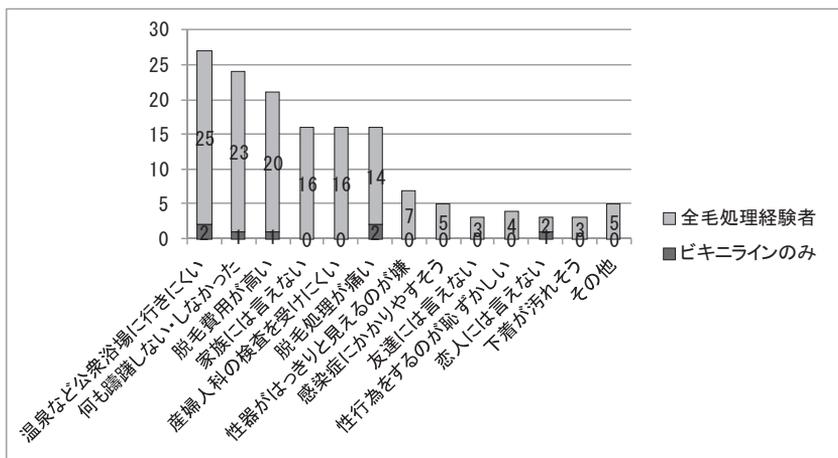


Figure 2 アンダーヘア処理を躊躇する理由 [人]

「一般的ではない」と受け止められたことには違いない。「止められた」(10名、16.4%)人も少なからずおり、否定的な反応も見られた。しかし半数近くの人が「[全処理を]勧められた」(20名、32.8%)、「一緒にエステに行ったり調べてくれた」(6名、9.8%)という肯定的な反応を受けており、「その他」(記述)には「私もしてみたいと興味を持たれた」「いいね！と言われた」といった回答もあり、彼女たちの意思が肯定的に尊重される場合も少なくないことがうかがえた。

さらに、全毛処理経験者に、アンダーヘアを全処理して変わったこと、変化を感じたことについて複数回答可能で尋ねた。結果は、「除毛・脱毛が楽になった」(22名、36.1%)、「性交渉しやすくなった」(24名、39.3%)、月経時のかぶれやにの軽減(「その他」より)、「清潔感・快適」(「その他」より)のような全毛処理の直接的効果だけでなく、「セクシーな下着をつけるようになった」(32名、52.5%)、「自己肯定感が高まった」(27名、44.3%)、「性器を大切にするようになった」(20名、32.8%)、「コンプレックスが一つなくなった」(「その他」より)といった精神面での変化も上位を占めた。また、「性交渉しにくくなった」が1名のみであったり、「性器を汚いと感じるように

なった」という回答者がいないことから、肯定的な変化がうかがえる。

自己肯定感についてより詳細に分析するために、全毛処理経験者を対象に、全処理前と全処理後の自身の性器についてのイメージをそれぞれ複数回答可能で尋ねた。興味深いことに、アンダーヘアの全処理前では「汚い」「臭い」「ジメジメしている」といった性器への否定的なイメージが目立ったが、それとほぼ真逆になるように、全処理後では「キレイ」「可愛い」「愛嬌がある」といった性器に対する肯定的な回答が増えた。清潔感やに関するものなど、全処理することで直接的に得られるだろう効果以外にも、全処理前には「触りたくない [もの]」（「触りたい」は回答者なし）という否定的な性器イメージが、全処理後には「触りたい [もの]」（「触りたくない」は回答者なし）に変化するなど、性器と被調査者たちとの関係性にも変化が出ている。このことは、全処理前には性器を「近い存在」とした回答者が1.6%だったのに対し、全処理

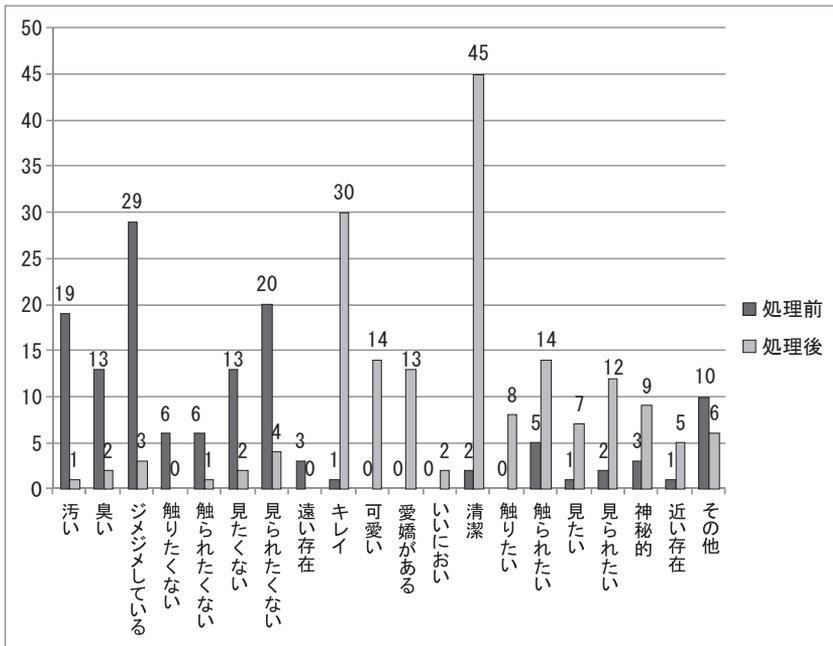


Figure 3 全毛処理前後の性器イメージ [人]

後には「近い存在」とした回答者が8.2%に上がり、さらに性器を「遠い存在」と回答した人は4.9%から0%に変化していることから、性器を自分自身の身体の一部としてより肯定的に直視し受け止めるようになったことがわかる。また、対他者の感情についても、「触られたくない」「見られたくない」から「触られたい」「見られたい」と肯定的に変化している。

最後の項目として、アンダーヘアの全処理に対する社会的誤解や偏見はあると思うか自由記述で尋ねたところ、必須回答に指定していなかったにも関わらず半数近い回答を得た。その多くが、アンダーヘアの全処理をしていることで「性癖がある」「性的に軽い」「性風俗産業で働いている」と思われるなど、性的イメージに関する誤解や偏見であり、「女性にとっては清潔に保つためでも男性にとってはセックスのためだと思われる」（自由記述より）など、特に男性からの理解が得られないという回答が多かった。また、アンダーヘアの全処理は「パートナーに強要されたと思われがち」（自由記述より）であり、「誰に見せるの？ 必要ないと言われる」（自由記述より）など、彼女たちの性器やアンダーヘアといったプライベートゾーンが、彼女たちのものであるにも関わらず他者との関係性の中でイメージ構築されていることがわかった。さらに、「パイパンという言葉のように性的なイメージが強い」「パイパンにはいや

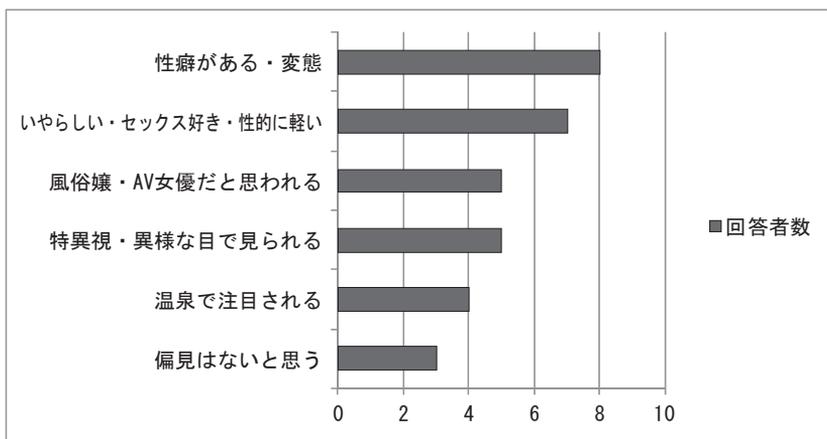


Figure 4 アンダーヘアの全処理に対する社会的誤解・偏見 [人]

- ・ポルノ関係者だと誤解されそう。
- ・年配の人は異様なものを見る目をするので温泉では目を引くし、親には言えない。
- ・変態と思われてそう。
- ・日本にはまだ[偏見が]あると思います。温泉などで着替える時によく見られます。
- ・そこまで処理するのは風俗とかの仕事をしている人やAV女優くらいだなんて考える人は多い気がします。
- ・日本ではアメリカ等に比べ浸透していないので異色の目で見られるか、変態扱いされそうですね。
- ・温泉では困ると思います。
- ・[偏見は]あると思う。まだ特別な感じ。まだ一般的でない。しかし、今後は変わらと思う。海外ではわきの脱毛と同じようにされているとき。
- ・産婦人科で女医を指名したが、なぜ全処理しているのか聞かれた。聞く必要がないと思った。
- ・セックスが好きな?と思われる。
- ・処理してるだけでセックスに軽いと思われると思う。
- ・変な性癖がないか疑われるらしいです。
- ・自分自身は脇・足・腕の脱毛の延長という感覚だが日本ではまだ広まっていない事もあり変な性癖や性産業に絡めたネガティブなイメージで見られると思う。
- ・引かれる。
- ・[偏見は]ある。パイパンという言葉のように性的な意味合いの大きい言葉の方がメジャー。ハイジニーナという言葉すら知らない人が多いため、衛生面のために剃っているとは理解されづらい。
- ・女性は理解があるが男性には勘違いされるというか軽くみられる。
- ・ハイジニーナにしている女性はパートナーに強要されたと思われがち。実際に何人もの男性にそう聞かれました。女性にとっては清潔に保つためでも男性にはSEXのためと思われる。
- ・古い人間や男性の方、また田舎の方は偏見あると思います。男性はどうしてもすきものという目でみると思います。
- ・AV女優がやってるイメージが強い。
- ・現在はハイジニーナは浸透していると思うので偏見等はないと思う。
- ・誰に見せるの?と聞かれる。必要無いと言われる。
- ・AV出演経験有るかと思われるのでは?もしくは、遊んでる女と思われると、友達に言われた。
- ・男性にこの事を話すと、性的趣味で全毛処理しているのかと誤解される。
- ・温泉などでは注目される。自分の中では、ハイジニーナにして満足しているので、視線は気にしない。むしろ、ハイジニーナの良さを教えてあげたいくらい。全処理に偏見があるのは、かなり損していると思う。ハイジニーナ…素敵 パイパン…いやらしい パイパンなんて表現 なくなればいいのに。
- ・うっとうしいからという理由だけなのに、変な性癖があると思われそう。
- ・AVの影響か、変態? (そういうプレイとか) だと思われる…。
- ・いやらしいイメージ。
- ・やっぱり無毛=アダルトビデオ、のイメージがあります…。
- ・みんなハイジニーナを始めれば偏見が無くなるのに。

Figure 5 アンダーヘアの全処理に対する偏見 (自由記述)
棒線：性的な誤解・偏見、二重線：海外との比較、波線：男性からの誤解

らしいイメージがある。ハイジニーナは素敵。パイパンなんて表現なくなればいい」（自由記述より）など、「パイパン」という言葉への嫌悪もみられた。「パイパン」は「ハイジニーナ」と同じくアンダーヘアの全毛処理や全毛処理した性器を指す言葉だが、ポルノグラフィで多用されたり特殊な性的嗜好（性的倒錯）として理解されることも多く、性的な意味合いの強い言葉である。そのため、「パイパン」という言葉に伴う性的なイメージからくる誤解や偏見のわずらわしさから解放されることを訴える記述が多く挙げられたと考えられる。

3 考察

3.1 先行調査との比較

海外の調査においては、清潔感や体毛嫌悪がアンダーヘア処理の最大の理由として挙げられたが（Tiggeman & Hodgson, 2008）、本調査でも同様の結果となった。また、Tiggeman & Hodgson（2008）とHerbenick et al.（2010）では、アンダーヘアの全処理をしている女性ほど自己肯定感が高いという結果がでており、本調査でも全毛処理後に自己肯定感が高まるなど類似する結果がみられた。アンダーヘア処理の理由や結果として海外の調査および本調査のどちらにおいても上位に回答された「清潔感」に関しては、アンダーヘア処理した性器を清潔とみなす価値観が、アンダーヘアを伴う自然体の性器を汚いものとみなし、女性の自然体を否定しているという指摘があるが（Cokal, 2007）、本調査でも全処理前後の性器に対するイメージは否定的なものから肯定的なものに変化しており、Cokal（2007）の考察を示唆する結果となった。

海外の調査結果と異なった点は、エステサロンの利用率、アンダーヘア処理に影響を与えたもの、そして、アンダーヘアの全処理が及ぼす影響についてであった。海外の調査では、エステサロンを利用してアンダーヘア処理する女性は1%－7%前後と低い利用率であったのに対し（Herberick et al., 2010, p. 5; Toerien et al., 2005, p. 402）、本調査では65.7%がエステサロンを利用してアンダーヘア処理を行っていた。これは、海外ではアンダーヘアの全処理または一部処理が浸透しているため家庭でアンダーヘア処理が行われることが多いのに対し、日本ではアンダーヘア処理の浸透率が低く、エステサロンが大きな情

報源となっているためではないかと考えられた。また、東京イセアクリニック（2011）の調査と比べても、本調査においてはサロン利用者が多かったが、これは、本調査の被調査者にアンダーヘアの全処理経験者が多く、アンダーヘアの一部処理に比べて手間のかかる全処理をエステサロンで行っている人が多いゆえではないかと考えられた。

また海外では、アンダーヘア処理に影響を与えたものとしてパートナーが多く挙げられたのに対し（Tiggemann & Hodgson, 2008, p. 895）、東京イセアクリニック（2011）でも本調査でもパートナーの影響を挙げた人は少なく、対他者を意識しているというよりも自身の爽快感や生理感覚のためにアンダーヘア処理している人が多かった。これについては、海外ではアンダーヘア処理がある程度浸透しているためにそれに言及するパートナーが多いのに対し、日本ではアンダーヘア処理が浸透していないことが要因の一つではないかと考えられた。

アンダーヘアの全処理が及ぼす影響については、海外の調査では、アンダーヘアの全処理をしている女性は産婦人科を受診する頻度が高く、自身の性器に対する自己肯定感と比例する結果であったが、本調査では、アンダーヘアの全処理後に産婦人科を受診しにくくなった（19.7%）という回答者が多く、「産婦人科に行きやすくなった」は1名（1.6%）に留まった。さらに、偏見についての自由記述を踏まえれば、ジェンダーや世代によっては、アンダーヘアの全処理を異質とみなす他者の視線・意識が存在し、アンダーヘアの全処理によって自身の性器に対する自己肯定感が増す一方でそれが肯定されない社会の中に女性たちが生きていることがわかった。

3.2 アンダーヘアの全処理に対する社会意識

先に見てきたように、日本においても海外においても女性の無毛化を支持する傾向は強い。しかしアンダーヘアに関しては、海外では「アンダーヘア処理を促す」社会意識が女性に強く影響しているのに対し（Tiggemann & Kenyon, 1998; Tiggemann et al., 2004; Cokal, 2007）、日本ではアンダーヘアをケアすることには肯定的でも、全処理することは未だ特異視されており、アンダーヘア処理を促す社会意識よりもむしろ、「アンダーヘア処理しないよう

促す」社会意識の方が強く働いているのではないかと考えられた。中村・西迫・森上・桑原（2008）によると、Axelrod（1986）は「社会規範を支えるメカニズムとして、メタ規範、支配力、内面化、抑止、社会的証明、メンバーシップ、法律、評判という8つの要因をあげて」（p. 59）いるが、温泉などの公共の場で特異な視線を浴びることは、規範を破る者に対して制裁を与えるメタ規範が働いていると考えられる。

また、本調査からは、アンダーヘア処理という個人的な行為が、性的な誤解や偏見と結びつけられていることもわかった。本調査において、多くの女性がアンダーヘアの全処理を性的には捉えておらず、アンダーヘアの全処理を性的イメージと強く結びつける男性への批判が浮かび上がった。これも中村他（2008）に準ずれば、規範を破ることで評価を著しく下げる「評判」（p. 60）が、アンダーヘアを処理させない規範維持の因子として働いていると考えられる。

しかし、アンダーヘア処理する女性たちは、「全毛処理するな」「全毛処理なんておかしい」といった社会意識にただ抑制されているのではなく、それに抵抗していることも本調査からは見えてきた。本調査における自由記述では、アンダーヘア処理する理由として「海外ではエチケット」「海外では常識」など、海外の状況を例に挙げる回答も幾つか見られ、女性たちが欧米の事例を引き合いに出しながら、「アンダーヘア処理して当然」という新たな意識を浸透させようとする様子うかがえた。また、アンダーヘア処理経験のある女性たちには、性的な誤解や偏見が強く付加された「パイパン」という言葉への嫌悪もみられ、衛生的な「ハイジニーナ」という言葉を意図的に使うことで、「パイパン」の持つ性的イメージに抵抗する女性たちの生活経験も明らかになった。⁷ 他者に頼まれたからアンダーヘアの全処理をするのではなく、自らの関心や希望でアンダーヘアを全処理し、自身の性器を汚いものや隠すべきものとしてではなく、時にはファッション感覚を交えて楽しむもの、肯定するものとして捉える女性たちの姿がそこにはあった。

4 今後の課題

本調査では、アンダーヘア処理の行為者を女性に限定している。それは、男性のアンダーヘア全処理が改めて男性性器を露わにすることがないのに対し、

女性のそれは性器が露わになることを意味し、それゆえに女性の全毛処理が男性のそれよりも性的なイメージと結びつけられやすく、全毛処理する女性たちが全毛処理する男性たちとは大きく異なる生活経験をしているだろうと考えたためである。しかし、たとえ男性のアンダーヘア全処理が改めて性器を露わにするという意味合いを持っていないにしても、アンダーヘア処理をする男性は女性に比べて少なく、そうした社会的背景の下で男性がアンダーヘア処理することの意味とアンダーヘア処理をめぐるジェンダー差を探ることもまた重要な課題である。

また、海外の調査においては、アンダーヘアの全処理は「女性器の幼児化・子ども扱い」であるという指摘もなされており (Cokal, 2007; Ensler, 2003)、興味深いが本論では考察しきれなかった。日本のポルノ産業では、アンダーヘア処理した性器がペドファイルやロリータ・コンプレックスと結びついているものが多く (週刊ポスト, 2010, p. 134)⁸、考察の余地があると思われた。

本調査では、日本にはアンダーヘアを全処理しないよう促す社会意識があり、それを破ることで性的な誤解や偏見と結びつけられることが明らかになったが、その社会的制裁についても今後さらに検討する必要があるだろう。例えば、「レイプ神話」と呼ばれる性暴力に関する誤解には、「女性がノーブラや、ミニスカートやぴったりの服を着て外出しているときは、トラブルを求めている」「強姦の被害者はふしだらで、評判が悪いことが多い」(稲本・クスマノ, 1980, p. 36) といった被害者の容姿や生活態度に落ち度を見出したり、「レイプは加害者が被害者に悩殺されたせいで起こる」(杉田, 2003, p. 17) など、被害者に性的イメージを付与することで性暴力を無化し、過小評価し、被害者に被害の責任を帰す機能 (稲本・クスマノ, 2009, p. 35) を果たすものがある。本調査でも、アンダーヘアの全処理は性的なイメージと強く結びつけられ、さらには、全毛処理する女性の職業や性生活、性的指向への否定的イメージにも繋がっていることが明らかとなっており、アンダーヘアを全処理した性器が、性暴力を正当化するスティグマ (烙印) の一つとなることも危惧されるため、さらなる研究が必要である。

Footnotes

- ¹ 「陰毛」という表記が一般的だが、陰という表記が「汚い」「隠すべき」など否定的イメージを内包する観点から、「性毛」や「アンダーヘア」（和製英語）という表記が支持される場合もある。しかし性毛は陰毛だけでなく脇毛等を含める第二性徴期に発毛する体毛の総称として使用されることもあり、また「性」が性的イメージを内包することから議論の余地があると考え、和製英語ではあるがより意味中立的な「アンダーヘア」を本論では使用する。
- ² エステサロン「PIUBELLO」の公式ホームページによると、同サロンにおける脱毛部位別利用ランキングには、1位にVライン（ビキニラインまたは前方から見えるアンダーヘア部分）、5位にOライン（肛門周辺）が入っている。最終検索日2013/08/14, http://www.piubello.co.jp/removal_rank.html
- ³ 家庭用ワックスとは、ジェル状やシート状のワックスを皮膚につけ、ワックスが固まった際にそれを剥がすことで体毛を処理する方法である。電気脱毛は毛根に針を刺して電流を流すことで体毛の発生源を破壊する処理法であり、レーザー脱毛は黒色に反応する光を当てることで体毛を破壊する処理法である。
- ⁴ Herbenick et al. (2010) がFGSIS (the Female Genital Self-image Scale) を用いて被調査者たちの性器に対するイメージを調査したところ、「自分の性器に肯定的な感情を持っている」「自分の性器の見た目に満足している」「性的パートナーに自分の性器を見られることは不快でない」「自分の性器はいい匂いがする」「自分の性器は成すべき機能を果たしている」「性器の検診（ヘルスケア）をするのは不快ではない」「自分の性器を恥ずかしいとは思わない」の全てにおいて、恒常的にアンダーヘアを全処理している群の数値が最も高く、アンダーヘアを全く処理していない群が「性器の見た目に満足している」の一項目を除く全ての項目において最も低い結果となっている (p. 6)。
- ⁵ 「痛み」に関しては、アンダーヘアを処理している量や範囲が大きくなればなるほど性交時に痛みを感じるという結果が出ている (Herbenick et al., 2010, p. 7)。
- ⁶ 一方でアンダーヘアの無い状態は「わいせつ」の概念から外れ、1980年代初期にはアンダーヘアのまだ生えていない少女たちのヌード写真集が摘発を受けず販売されている (下川, 1993)。
- ⁷ 例えば図書・ビデオ検索サイト Amazon.co.jp で、「パイパン」をキーワードに入力すると無数のアダルトビデオがヒットするのに対し、「ハイジニーナ」をキーワードとするアダルトビデオは10件にも満たない。また、「ハイジニーナ」をキーワードと

してヒットするアダルトビデオの発売年は全て2012年以降であり、「パイパン」イメージから解放されたいハイジニーナ女性たちの思いとは裏腹に、「ハイジニーナ」という新語を新たな猥褻用語として取り込もうとするポルノ業界の動向がみられる（最終検索日2012/07/17）。

- ⁸ ペドファイルおよびロリータ・コンプレックスはともに小児性愛を指す言葉である。前述のAmazon.co.jpで、「パイパン」をキーワードに入力すると、「小学生」や「高校生」など未成年を指す言葉をタイトルに含むものや、「ロリコン」「幼い」などをタイトルに含むものが多くヒットする（最終検索日2012/07/23）。

References

- Axelrod, Robert. (1986). An evolutionary approach to norms, In *American Political Science Review*, 80, 4, pp. 1095–1111, Cambridge University Press.
- Basow, Susan. (1991). The hairless ideal: Women and their body hair. In *Psychology of Women Quarterly*, 15, pp. 83–96. SAGE publication.
- Basow, Susan & Braman, Amie. (1998). Women and body hair: Social perceptions and attitudes. In *Psychology of Women Quarterly*, 22, pp. 637–645, SAGE publication.
- Cokal, Susann. (2007). Clean Porn: The Visual Aesthetics of Hygiene, Hot Sex, and Hair Removal. In Hall, Ann. & Bishop, Mardia. (Eds.). *Pop-Porno; Pornography in American Culture*. pp. 137–153. Praeger, Westport, Connecticut, London.
- Enslers, Eve. (2003). 『ヴァギナ・モノローグ』。(岸本佐知子訳, Trans.). 東京: 白水社. (Original work published 1998–2001, *The Vagina Monologues*, by Enslers, Eve. Villard.)
- Herbenick, Devra., Schick, Vanessa., Reece, Michael., Sanders, Stephanie & Fortenberry, Dennis. (2010). Pubic Hair removal among Women in the United States: Prevalence, Methods, and Characteristics. In *International Society for Sexual Medicine*. pp. 1–9. ISSM.
- Schick, Vanessa., Rima, Brandi., Calabrese, Sarah. (2009). Evulvalution: The portrayal of women's external genitalia and physique across time and the current Barbie doll ideals. In *Journal of Sex Research*, NOV. 11. 2009, 47, pp. 1–9. Society for Scientific Study of Sexuality.
- Synnott, Anthony. (1993). The body social: *Symbolism, Self and Society*. London: Routledge.
- Tiggemann, Marika & Hodgson, Suzanna. (2008). The Hairlessness Norm extended: Reasons for and Predictors of Women's Body Hair Removal at Different Body Sites. In *Sex Roles*, Vol. 59, June 2008, pp. 889–897, Springer.
- Tiggemann, Marika & Kenyon, Sarah. (1998). The Hairlessness Norm: The Removal of Body Hair in Women. In *Sex Roles*, Vol. 39, Nos. 11/12, 1998, pp. 873–885. Springer.
- Tiggemann, Marika & Lewis, Christine. (2004). Attitudes toward women's body hair:

- Relationship with disgust sensitivity. In *Psychology of Women Quarterly*, 28, pp. 381–387, Blackwell Publishing.
- Toerien, Merran., Wilkinson, Sue & Choi, Precilla. (2005). Body Hair Removal: The 'Mundane' Production of Normative Femininity. In *Sex Roles*, Vol. 52, Nos. 5/6, March 2005, pp. 399–406. Springer.
- Yakas, Laura. (2009). Femininity, Sexuality, and Body Hair: The Female Body Hair (less) Ideal. In *Focus Anthropology* VIII, 2009, pp. 1–18. Kenyon College.
- 荒川忠良. (1956). 「いわゆる陰部無毛症と結婚問題」. 『臨床と研究』 33 (12). pp. 46–50. 福岡：大道学館出版部.
- 風柳庵升丸&鶏告亭夜宴&一立斎広重. (1849). 『新撰狂句図会』. 山田屋庄兵衛.
- 稲本絵里&クスモノ, ジェリー. (2009). 「犯罪被害者に対する社会的偏見：強姦神話と犯罪被害の暗数との関連」. 『上智大学心理学年報』. 第33巻, 2009年3月3日, pp. 33–43. 上智大学.
- 中村慎佑・西迫成一郎・森上幸夫・桑原尚史. (2008). 「社会的規範からの逸脱行動の相と類型：社会的規範の不変性と可変性に関する研究 (1)」. 『関西大学総合情報学部紀要「情報研究」』, 第29号, 2008年7月, pp. 55–68. 関西大学.
- 二之宮隆編. (2011). 『江戸の華 吉原遊廓』. 東京：双葉社.
- 週刊ポスト. 「イマドキ娘の「下の毛」事情」. 『週刊ポスト』 42巻32号, 通巻2089号, 2010年8月6日号, pp. 132–135. 東京：小学館.
- 下川聡史. (1992). 『昭和性相史1』. 電子本ピコ第三書館販売.
- 下川聡史. (1993). 『昭和性相史4』. 電子本ピコ第三書館販売.
- 末井昭編. (1981–1988). 『写真時代』. 東京：白夜書房.
- 杉田聡. (2003). 『レイプの政治学』. 東京：明石書店.
- 東京イセアクリニック. (2011). 『今や常識！ アンダーヘア手入れ』. 最終検索日 2013/08/14. http://www.telnavi.jp/user_image/pdf/9c57b26ece7d940d13a99d3514c64d4d.pdf
- 安田理央&雨宮まみ. (2006). 『エロの敵 今、アダルトメディアに起こりつつあること』. 東京：翔泳社.

Female Pubic Hair Removal and Sexual Prejudice

Asako TANAKA

Pubic hair removal has become very normative in recent years, especially for young women in western countries. It has also influenced contemporary Japanese women in their twenties and thirties. On one hand, "Hygienina," which is derived from "Hygiene (originally means cleanliness)", has been a focal point of cleanliness and fashion in Japan. On the other hand, many Japanese women are hesitant to remove all of their pubic hair because of the stereotype that they are forced to remove it. Further, removal of all of the hair is seen as lewd and instigates social prejudice. My research was investigated Japanese women's experiences of pubic hair removal and social awareness about female genitals and pubic hair removal in Japan. I interviewed 65 women who have removed their pubic hair, and found that the half of interviewees had experiences of removing all of their pubic hair, and hair removals were performed for the sake of cleanliness and not for reasons related to sexual activities. I also concluded that in comparison with western countries, Japan has a strong social norm not to remove all pubic hair and sexual prejudice against people who deviate from that norm. Furthermore, my research clarified that these women are not only overwhelmed by social norms, but they are also actively engaged in trying to change social awareness. They are also building self-esteem through enjoyment of pubic hair removal experience.

Keywords:

Female genitals, Pubic hair removal, Hygiene, Sexual prejudice, Social norms